二松學舍大學
父母会報

平成５年５月10日創刊
平成25年1月25日発行
（第79号）

二松学舎大学父母会
（本部・事務局）
東京都千代田区三番町6番地16
二松学舎大学教学課

題字は
故 観山貞廣常吉先生書

新春を迎えて

武道館とスカイツリー（九段校舎13Fラウンジより）

父母会長
岩田 秀生

二松学舎大学父母会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。今年は多くの皆様が平穏無事に新年を迎えることが出来たこととお慶び申し上げます。また、今期設立二〇周年を迎えた父母会活動も会員皆様方のお力添えにより、現時点まで全ての行事とも恙無く執り行うことが出来ていますことを心から感謝申し上げます。

さて、日本では高齢化と人口減少による経済活動の低下により、厳しい社会情勢が今後もしばらく続くものと予想されています。

係る社会情勢のもと、就職活動時に「大学在学中は何に熱中し、どの様な成果を得たのか？」・「将来の夢や目標、その実現に向けどの様な努力をし実力を身に付けたのか？」等の根気・熱意の継続力や、「語学は堪能か？」・「ＴＯＥＩＣの得点は？」・「海外勤務は可能か？」等の国際化適応力を問われるケースが増加しています。私達父母が学生だった頃には考えてもいなかったことを想定しなければならない厳しい時代と言わざるを得ません。

学生諸君には、例えば、部活動やサークル活動を続けている人は日々練習を重ねて四年生の時には全国大会での上位入賞を、教職を目指す人は希望する都道府県の出題傾向を把握するとともに理数系科目のスキルアップを、国際社会で活躍したい人は英語を含む数カ国語のスキルアップを図りコミュニュケーション能力を高める等、個人個人が一年生の時から夢や目標を持って、難局を乗り越えていっていただきたいと切に願っています。

父母会では「何か」に夢や目標を求めて努力する学生に対して、「子供達が希望を持って生きられる社会を創るのが私達父母の責任。」と考え、大学と緊密に連携して強力に支援を行っていく所存です。

今期の父母会活動も終盤を迎えました。「父母会で出来る学生支援は何か。」を役員一丸になって継続して考え、最後まで全力で父母会活動に取り組んで参りますので、引き続き父母会へのご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。

年頭所感

―青松多寿色―

学校法人　二松学舎
理事長　水戸英則

父母会会員の皆様に謹んで新年のご挨拶を申し上げます。また、日頃よりお寄せいただいております本学の教育研究活動へのご理解とご支援に対し、心より御礼申し上げます。

青松多寿色

創立一三六年目の新年を迎え、二松学舎は、長い歴史に更に歳月を重ね、「うつろうことのない不動の松の青さ」を誇り、教育機関として「永遠の寿の色」を体現し続けて行きます。

昨年は一三五周年を一つの節目とし、創設時の原点に立ち返り、本学の将来を見直すこととしました。漢学塾二松学舎創設時の建学の精神、「東洋の精神による人格の陶冶」「己を修め、人を修め、一世に有用なる人物を養成する」の考え方を全ての新たなスタートとし、育成する人材像の確立、それを実現する大学の教育ビジョンを決め、教育改革を通じて、より有為な人材を世の中に輩出することを目的としました。

我が国の少子高齢化の加速、グローバル化、知的基盤社会化等々様々な環境変化により、社会の価値観が変わり、また将来の予測が困難な時代になってきております。特に少子化問題は、わが国を実質的に支えている中間層大卒の枯渇化が、わが国国力を減衰させていくこととなり、これら層の量・質両面の引き上げが必要であることは、昨年の国家戦略会議でも、同様の提言が行われております。この中で、国民の大学教育改革の要請が高まってきております。大学の社会的責任を果たす意味でも、これに応えていく必要があります。この点に関し、我が国大学生の授業時間以外の学修時間が、米欧の学生に比較し、5分の1から10分の1と極端に少ない点を認識しておく必要があります。この状況を改善させるためには、授業計画（シラバス）の充実、教育課程のナンバリング等体系化、授業方法における双方向授業やアクティブラーニング、インターンシップ等の教室外学修プログラムの展開などが必要になってきます。これらを通じて、学校法人各設置校間の接続を円滑化し、長期ビジョンの目的である「わが国に根ざした道徳心を基に、国際化、高度情報化の進展等知的基盤社会化が進む中で、自分で考え、判断し、行動する、各分野で活躍できる人材」の養成を図っていくことが、今後、本学に与えられた使命であるといえます。

どうか、本プランの実現のため、父母会会員の皆様に対して、引き続くご支援、ご協力をお願いして、発巳年、新年のご挨拶と致します。

生徒の学修時間を引き上げ、主体的に考える力を修得させていくことが肝要といえます。こうした教育体制を、大学、高校、中学校等各設置校で、自主的に責任を持って行う体制を定着させていけば、中・高接続、高・大接続問題や大学と職業との接続の問題は、徐々に解消され、各段階における入試のあり方も変容していくものと考えられます。

本年度から始まるアクションプランの主要課題の一つは、かかる教育体制の構築を進め、各設置校で実施していくことにあります。

年頭所感

「よしやるぞ」の意気で

二松学舎大学
学長　渡辺和則

皆さま、新年あけましておめでとうございます。一昨年の大震災とそれによって起きた原発事故による被害に遭い、現在復興に向けて頑張っておられる父母会会員の方々のことを思うと、すっと「おめでとうございます」とは言えない年明けになりました。大学としては、本年も被災学生に対して物心両面の支援をしてまいりますので、父母会の皆さまにはご理解とご協力を賜りますようお願い致します。

さて、冷頭に当たっては、「よしやるぞ」という意気が一番大切です。今日の就職状況では、三年生になって学問らしい学問がやっとできるようになる時期に就職活動が始まり、四年生の秋ごろまでの期間を就職活動に喰われてしまうという、実に落ち着かないことになっています。そのため、何ほどの専門的学問もやらないで、大学を通過して行くに過ぎないという学生諸君が少なくありません。彼らの頭の中は就職活動のことでいっぱいで、大学の勉強と就職活動を両立させるだけの精神的余裕がないということなのかもしれません。それはもっともなことで、三年生と四年生の学生諸君にとって就職問題は、人生において遭遇する、おそらく初めての厳しい苦境であると言えるからです。

苦境に立たされた時、それに独り耐えられるほど、人間は強くはありません。苦しさから逃れるために、人は自分で自分を見限ってしまいたいと思うものです。しかし、アスリートたちが、「これまで自分が頑張ってこられたのは家族の支えがあったからです」と言うように、人は、自分の後ろで、「ここで挫けないで、頑張れ」と、祈り、励まし、自分を支えてくれる人がいることを知る時、信じられないほどの力を発揮するものです。

ご父母の皆さんはご子弟の支えとなる一番の理解者です。学生時代というものは、人生において最も楽しい時であると同時に、初めて厳しい苦境に立たされる時でもあります。ですから、ご父母の皆さんには、人生の先輩として、そして社会人として、ご自分が仕事に対しどんな誇りと使命感をもって働いてきたか、またご自分の現在の生活と仕事と将来に対してどのような考えを持っているか、ということを語ってあげてください。ご子弟にとって、それが一番の励ましになると思います。

若い時には、人は、人生の道は最初からあり、しかもその道は真っ直ぐなものだと思い込んでいますが、人生の道はそんな単純なものではありません。人生には転機が何度かあります。転機が訪れた時、それをチャンスとしてしっかりとつかまえて、勇気と賢明をもってその先の人生を切り拓いていくことが重要です。そのためには、学生諸君は日頃からしっかり勉強して知力と精神を鍛えておかねばなりません。学生諸君はいま自分が立っている場所や環境について不平不満を言わず、いま自分がしなければならないことは何か、そして、いま自分にできることは何かを考え、いま自分にできることを一つずつこなして行くことが大切です。

また、学生諸君は、事が思い通りに行かなくても決して焦らないでください。人生において好スタートを切れなかったからその後の人生もうまく行かないというものではありません。始めに苦しむ者は後で笑うということがよくあります。逆に、始めに幸運をつかんだ者が後で大きな失敗をすることもよくあります。ですから、目標を見つめながら、また眼前の事柄を一つひとつしっかりこなして行くようにしてください。そうすることが、結局は目標への近道になると思います。学生諸君には、本年も「よしやるぞ」という意気で頑張ってくれることを期待しております。

最後に、私たちは、ご子弟たちの知力を鍛えることはもちろんですが、彼らが他の人に気遣いできるほどに成熟した人物に成長するよう物心両面の支援をしてまいりますので、ご父母の皆さまには、本年もご理解とご協力の程宜しくお願い致します。

私の学生時代

文学部 教授
谷口　貢

学生時代に過ごした四年間を今から振り返ってみると、長い時間のようでもあり、また短い時間のようでもあった。

学生時代が長い時間であったように思える点は、大学入学以前や卒業後に比して、本当の意味で自由な時間をもてたことである。新潟県糸魚川市の農村地域で育ち高校まで過ごしたので、東京という大都会における一人暮らしは実に新鮮であった。アルバイトをする必要はあったが、読書や友人たちとのつきあいなどの時間調整を自分なりにデザインできることに喜びを見出していた。

その一方、卒業後の進路は、できれば出版社に入って編集の仕事につきたいと漠然と考えるのみで、就職活動に精を出せないでいた（現在のような就活の厳しさはなかった）。大学生活の後半は、社会や文化についての知見を幅広く学びたいという思いが募り、濫読するようになった。

その中で、体系的な知識を得るには、好きな本を気の向くままに読むのではなく、明確な方針を立てて読書していくことの大切さを知るようになった。そこで、同じ志向をもつ友人たちと定期的に集まって読書会や研究会を始めた。そうなると、時間はいくらあっても足りないと思うようになり、学生時代は短い時間であったような気がしている。

読書会や研究会という学びのスタイルは、大学を卒業した後も友人や知人たちと継続した。そして、その中で柳田国男の『遠野物語』や『日本の祭』などの著作と出会い、自分が真に学びたいのは、日本社会の基層文化を追究する民俗学という学問であることに目覚め、研究者の道に入っていく一つのきっかけとなった。

大学に在籍したのは、一九六六年から七〇年なので、いわゆる「団塊の世代」に属している。われわれの世代は何かと話題になるが、日本社会が経済的に苦しい時代から、高度経済成長を遂げて大きく変貌していく姿をまのあたりにできた最後の世代であった。

国際政治経済学部 教授
手島茂樹

振り返れば学生時代はその後の人生の原点かもしれません。横浜国立大学経済学部における私の師、宮崎義一先生は、多国籍企業論・直接投資論・開発経済学等の広汎な分野で多くの書籍を出版し、新聞・雑誌等でも非常に注目されていました。論調は常に明確で舌鋒鋭かったが、ゼミ等でご教示を受けるときは至って温厚、懇切・丁寧・明確にご指導頂きました。ゼミ運営は学生主体で、先生の指導を受ける週1回の本ゼミのテーマ、学生だけの同じく週1回の自主ゼミのテーマ、年2回のゼミ合宿の演習内容・ロジステイックス等、学生が準備し、先生にご相談・ご承認を得ていましたが、皆、「今度は先生が何をおっしゃるか」を楽しみにしていました。特に印象に残っているのは、「実体経済の真相を良く見ること」と「企業が主な経済主体となるモデル構築を行うべきこと」の二つのアドバイスで、今でも私の思考の原点にあります。もう一つの私へのアドバイスは「君、学者になるのでなければ、専門性を重視する銀行か、国家公務員上級職に行きなさい。そして留学の機会があれば行くがよい」。当時、宮崎ゼミからは、日銀等金融機関や通産省・経済企画庁等官庁に行くひとが多く、私は日本輸出入銀行（現、国際協力銀行）に入行、機会を得て、米国Yale（エール）大学大学院に留学しました。27年間勤務した同行では外国政府や外国銀行への国家的融資業務等、堪能しましたが、結局、最後には学者になり、二松学舎にお世話になって、多国籍企業論・直接投資論・国際経済学等を研究・教育しています。恩師の影響力はかくも絶大です。学生当時は、行政法の大家であった成田頼明先生の法律ゼミにも入り、また、男声合唱（横浜国大グリークラブ）もやっていたので、演習・練習・合宿に明け暮れる、忙しくも楽しい時代でした。両先生とも故人になられましたが、学生時代の仲間とは今でも懇談と称して飲み会をやっています。昨年は宮崎ゼミ同期の仲間と共に韓国大使であった、同じくゼミ同期の武藤正敏君を訪問しました。男声合唱はOB合唱団に入団することで再開、保土ケ谷キャンパスの教育文化ホール等で毎週練習しています。

2012 創縁祭

本年度も11月3日（土）・4日（日）に、二松学舎大学祭「創縁祭」が開催されました。父母会役員会では、無料休憩所という形で毎年参加しています。演武、伝統芸能、演劇、模擬店、ミスコンテストなど学生たちのチームワークとアイディアの賜物をご覧ください。

平成25年１月25日(金)　二松学舎大学父母会報　第79号

キャリアセンターだより㉙

今年も三年生の就職活動が十二月からスタートしました。履歴書・エントリーシートの添削などの相談に訪れる学生も増え、キャリアセンターが一年で最も活気のあるシーズンとなりました。

前々回のこのコーナーで、「自己分析」「業界研究」「試験対策」について触れさせていただいております。ぜひ親子で就職活動を考えていただければと思います。

その際には、ハウツーにとらわれすぎず、「この子がうちの会社に来たら採用するだろうか」という視点で、自分のお子様をみていただければと思います。

その中で一番重要なことは「挨拶」です。企業の採用においても、気持ちの良い挨拶のできる学生というのは好印象です。「そんな簡単なこと」とお思いでしょうが、今の学生は普段でもきちんとした挨拶ができていません。会社の面接ではなおさら緊張と不安で挨拶が疎かになってしまう学生がとても多いのです。

また、面接の受け答えがしどろもどろになってしまう学生が多いので、ぜひ大人と話す機会を多く作ってあげてください。親戚の集まる場に連れていく、職場見学や、会社の部下の方と話をする機会を設けるなど、どんなことでも構いません。

就職に臆病になる学生の多くは、就職に関する情報が多すぎて、それを上手く消化できないタイプがほとんどです。まずは「働く」ということに対して、しっかりした考えを持てるようにアドバイスをしてあげてください。そこから先のハウツーについては、キャリアセンターで引き受けますので、キャリアセンターを積極的に利用するようにアドバイスをお願いいたします。

一二月二〇日（木）にグランドパレスにおいて開催した、本学最大のイベント、企業研究セミナー（学内合同企業説明会）には三百八十名の学生が参加しました。ここ最近では最も多い人数です。

またこれに先立ち、一二月一日（土）に幕張メッセにおいて開催された、千葉県大学就職指導会が主催する企業研究セミナーにも全体で約四〇〇〇名の参加者のうち、本学学生は約百三十名が参加しております。

数字のうえでは学生の意識の高さが感じられますが、ただ漠然と参加し、一・二社ほど話を聞いたら帰ってしまうような学生もここ数年に比べて多く見受けられましたので、若干の心配をしております。そんな学生の何人かに話を聞いてみると、「自分の興味のある企業は一社だけだった」「自分の目指す業界の企業がない」などの理由が挙げられました。一見立派な理由ですが、これでは合同企業説明会に参加する意味があまりありません。せっかく多くの業界・企業を知るチャンスをみすみす逃し、自分の可能性を狭めてしまっています。とくに就職活動の最初の時期こそ、視野を広げた活動をしてもらいたいと思います。

〈内定を得ていない四年生のご父母の皆様へ〉

キャリアセンターでは、四年生に対して、現在も合同企業説明会をはじめとする就職支援を継続しておりますが、学生の参加率が、ここ数年の学生と比較しても、著しく悪い状況です。また個別に電話連絡などもしておりますが、なかなか繋がりません。

私たちは最後の一人まで最大限の支援をしていきたいと考えておりますが、肝心の学生たちがこのような状況では、支援にも限界があります。

就職環境は、今年も大変厳しい状況ですが、内定率も改善の兆しをみせています。もうひと踏ん張り頑張って頂ければ、必ず内定を得ることができると思います。そのためには学生自身がもう一度「本気」になってもらう必要があります。ご父母の皆様にもお子様への声かけ、応援を再度お願いいたします。

現在でも採用継続中の企業はまだまだあります。その中には、いわゆる「ブラック企業」と言われている会社もあるのが事実ですが、そのような企業に引っ掛からないようにするためには、キャリアセンターを利用していただくことが一番の防衛策です。

本学のキャリアセンターで紹介している求人は、知名度が低いために、採用に苦労している企業や、今まで新卒採用をあまりやっていない企業などを中心に、有名ではないけれども、堅実な経営をしている企業の中から、それぞれの学生に合った企業を選別しています。大学の内定率の向上のために、どんな企業でもいいからとりあえず内定を採らせてしまおうなどという指導はしておりませんので、安心して相談に来てください。

平成24年度　国際交流年末懇親会

本年度の国際交流年末懇親会は、左記の日程で開催されました。

日　時：平成24年12月8日（土）
　　17：00～18：30
場　所：九段キャンパス1号館
　　13階ラウンジ

教職員・父母会役員・留学生・学生合わせて約70名が参加し、賑やかな交流の機会となりました。

渡辺和則学長のご挨拶、岩田秀生父母会長の乾杯の音頭に引き続き、外国人留学生日本語スピーチコンテスト表彰式と、奥井基継奨学金授与式が行われました。トロフィーや表彰状等を授与された留学生は、喜びの表情で先生方と一緒に写真をとったり、表彰状を見せ合ったりしていました。その後、交換留学生2名、学生会執行委員長、国際交流センター長からの挨拶があり、盛況のうちに終了しました。

遠く母国を離れ勉学に努める留学生にとって、先生方や父母会役員の皆様の労いの言葉が何よりに励みになっています。次回もたくさんの方々のご参加をお待ちしています。

学生相談室だより79

カウンセラー　阿部 千香子

不景気の中、就職活動は困難を極めています。親御さんの年代と比べると間口ははるかに狭くなり、アルバイトさえなかなか決まらないのが現状です。就職試験に落ち続けて焦っているところに、親から努力不足を責める言葉をかけられて追いつめられてしまう学生は少なくありません。一方で、深刻に悩んで打ち明けたにもかかわらず、「すぐに決まるものだから」と流されてしまい、軽んじられたと感じる学生もいます。話を聞いていて感じるのは、学生が前にしている現実と親の認識とのズレです。人は自分の過去の経験から今を理解しがちです。しかし、「あの頃」と「今」とではさまざまな条件が違っていることは、すでにご承知のことと思います。

二松学舎大学でよく耳にするのは、教員資格取得を巡っての親子のズレです。「教員免許さえ持っていれば」という思いは、今は通用しません。少子化の影響から、採用は少なくなっていますし、免許の更新制度もあります。また、教職課程のカリキュラムは以前と比べてかなり負担の大きなものとなり、他の活動に支障が出ることもあります。教員になりたいという思いが強い学生でない限り、「そこまでして取る意味があるのだろうか」と立ち止まって考えるのは当然のことと思います。親子での話し合いの際、このことを頭に置いてほしいと思います。

また、この時期はとくに身近な勤労者の存在が重要になる時です。彼らは社会人のモデルとして、学生に明に暗に教育をしています。親や教員、バイト先の店長などの何気ない一言に勇気づけられたり、働き続ける強さに気づいたりする。勤労者との交流の機会を持つとよいと思います。

進路選択や就職活動は学生が自分で行う成長への挑戦です。だからこそ大きな負担がかかります。応援団は必要です。一番の応援団、それは親御さんをおいて他にありません。どうぞ、学生の一番の応援団でいてください。

派遣留学生の声

平成二十三年度派遣留学生として、台湾の中国文化大学に派遣された礒江厚綺さん、韓国の成均館大学校に派遣された吉岡萌さんから留学生活について綴っていただきました。

派遣留学を終えて

文学部
中国文学科　四年
礒江　厚綺

一昨年の9月、台湾での留学生活が始まりました。今まで旅行で台湾を訪れたことはありましたが、一年間に及ぶ滞在は初めての経験でしたので、日本と台湾の習慣の違いを肌で感じ、時には戸惑うこともありましたが、次第に慣れていき、とにかく毎日刺激のある生活でした。

授業は毎朝8時からスタートしました。日本より一時間早く始まり、下校時刻は遅いときで夜7時だったので、体を慣らすのに少々苦労しました。しかし、それよりも苦労したのが、中国語のみで行われる授業に必死で置いていかれないようについていくことです。留学をする前は、何とかなるだろうと思っていましたが、いざ授業が始まると意味の分からない単語が次々に出てきます。必死に辞書を捲りますが、間に合わない時もあります。そのような時には、ひとまず発音をメモして、後程調べるなどしました。また、宿題の量も多かったのも印象的でした。

私が留学生活で心掛けたことは、現地に住む人となるべく交流することです。日本では言葉を習う機会はたくさんあっても、実際に使う機会は少なかったので、台湾にいる一年間は現地人との交流を積極的に行いました。具体的には、留学先である中国文化大学の学生と週に一度の「日本語コーナー」です。これは、日本語に興味のある台湾人学生と、日本人交換留学生の言語交換の場であり、毎回台湾人学生の興味のあるテーマに沿って、言葉の言い回しや、その方面特有の固有名詞を教え合う時間のことです。

また、それ以外に、私の趣味である野球観戦のためにしばしば野球場へ行き、現地のファンと野球談義をさせてもらいました。このような会話の時に出てくる単語や言い回しで気になったものはメモして、忘れないようにしました。

この一年間、お世話になった全ての方に改めて感謝すると共に、今後は今までに得られた貴重な経験を生かして、日台の架け橋になれるよう努力します。

留学で得たもの

文学部
中国文学科　四年
吉岡　萌

留学では、韓国語、文化を実際に体験しながら身に着けることができたのはもちろんですが、私が想定していなかったのは、私のように韓国へ留学に来た各国の留学生との交流でした。以前から外国の文化、言語に関心があった私ですが、仲良くなった各国の学生達から文化や言語をいろいろと教えてもらい更に関心が高まりました。留学生の中には日本語を勉強している子が多く、お互いの言語を教えあいもしました。日本語を日本語母語話者でない人に教えるのは思うようにいかなく、その国の言葉に教えたい日本語に値する言葉がなかったり、日本の文化と一緒に言語を教えたりしなくてはいけない時がありました。しかし、日本の国のことや日本語を教えていくことで私も再度日本について勉強し、日本語の文法といろいろな外国との差について知ることができ、楽しかったです。そして、韓国語の語学堂で、わかりやすく韓国語を説明してくださり、クラスを楽しく勉強しやすい環境にしてくださったオ先生の授業を受け、言語を勉強することがさらに楽しくなりました。

留学で、日本語を教えることの楽しさを知り、言語を勉強する大変さと楽しさも今まで以上に感じました。そして、日本語教師になりたいと思うようになりました。今までこれといった将来の夢もなかった私ですが、韓国に留学し、やりたいことを見つけました。

帰国後は、日本語教師養成コースを開始し、同時に日本語教師としての仕事に役立てようと韓国語をはじめ色々な言語の勉強と各国の言語と日本語の差についても勉強しています。留学するか悩んでいましたが、留学して将来の夢をみつけ、多くの素晴らしい人たちに出会え、たくさんの経験ができ、言語学習だけでなく他の分野の学習にも役立っています。留学前は、留学をするか悩みましたが、今は決意し本当によかったと思います。留学で得たことをこれからの学業に生かしていきます。

ゼミ探訪

岩田ゼミナール

私たちが所属する岩田ゼミナールは、四年生三名、三年生七名の少人数で構成されています。岩田ゼミナールでは、基本的に各々の興味のある経済学に関連する研究を自主的に進め、岩田先生と他のゼミ生の前で毎週一名ずつ自分の研究成果を発表しています。岩田先生の専門分野が理論経済学ということもあり、私たちは主にさまざまな経済現象の背後にある経済理論を中心に研究を進めています。そのため、経済学の原理を学ぶことによってさまざまな経済問題を理論的に追求するだけでなく、論理的思考が身につき、実生活にも経済学的思考を応用できるようになりました。他のゼミ生が知らない研究テーマを発表することになるため、事前準備をしっかりと行い、発表内容を頭に入れてこないと十分なプレゼンテーションをすることができません。そして、他のゼミ生のプレゼンテーションを理解することによって自分の研究テーマ以外の知識を深めることも重要な課題となります。当初は各々がレジュメの作成や発表の仕方など上手くいかないことが多々ありましたが、岩田先生の丁寧な改善点のアドバイスもあり、試行錯誤とゼミナール内での活発な議論を行うことによって、まだ岩田先生が求めている水準には程遠いですが、徐々にゼミナールの質が上がってきているのではないかと思います。

このように私たちは、岩田先生の指導のもと意欲的に経済学の原理を学習し、意識を高く持ちながらゼミナール活動を実践しています。学びたいという意識が高い者にとって、有意義かつ充足感の得られるゼミナールであり、今後もゼミ生一同鼓舞し合いながら研究を進めていきたいと思います。

国際政治経済学科三年
薄井良英

稲田ゼミナール

こんにちは。稲田ゼミでは、近世文学について学んでいます。

二〇一二年秋、アニメ映画『伏』が全国公開されました。当ゼミで取りあげているのは、その原作の大元の作品である歴史やチャンバラ、ファンタジーやサスペンスなどの要素が詰まった江戸の快作、『南総里見八犬伝』です。今年度は一年を通して、原文を毎時間一章段ずつ読み進めていきました。基本的な授業は、その時間で読んだ章段に関してゼミ生が疑問や意見を出し、先生がそれに補足するスタイルです。そこで出し合った疑問を手掛かりに、後期では個人発表を行いました。前期と後期に一度ずつ『八犬伝』を映画化した作品を鑑賞し、作者である曲亭馬琴の井戸や墓などを訪ねる文学散歩を行いました。のんびりと街を散策しつつ、先生から授業内容とはまた違ったお話が聞ける機会です。春先には合宿を行う予定です。

雰囲気は堅苦しくなく穏やかで、それぞれが個性を発揮出来る場です。どんなに突拍子もない考えでも先生がフォローして下さるので、単なる思い付きでも恐れずに発表することが出来ます。自由な発想が可能なので、ゼミ生の様々な観点からの意見がいい刺激になりました。こんな卒論を書いてみたいけどパスされないかも、という心配がありません。またスケジュールや体調などを考慮して下さるので、無理なく課題を熟せます。

出来たばかりのゼミで、今年度はゼミ生三人と稲田先生で研究室にて前述したような一年を送ってきました。小説としての『八犬伝』の純粋な面白さを知ることの出来る、肩は凝らないけど充実したゼミです。

文学部国文学科三年
木村静花

卒業パーティーの開催について

父母会では、卒業生の皆さんのご卒業を祝し、また、在学中お世話になった教職員の皆様への感謝の気持ちを込めて、卒業パーティーを開催しています。卒業生の皆さんは是非ご出席願います。卒業パーティーの内容は次のとおりです。

【日　時】
平成二十五年
三月十九日(火)
午後一時半から三時半

【会　場】
帝国ホテル
本館三階「富士の間」
〒一〇〇―八五五八
東京都千代田区内幸町
一―一―一
地下鉄日比谷駅下車
徒歩三分

【次　第】
一. 開会
二. 挨拶
三. 乾杯
四. 歓談・ゼミ写真撮影
五. 閉会

○歓談の時間を利用して、ゼミ毎の集合写真撮影を設けています。時間に制約がありますので、あらかじめ撮影順番を決めております。ご協力ください。

○卒業生の皆さんには「リボン」を必ず着用していただきます。「リボン」は卒業式当日配布します。

大学の講義を受講してみませんか

二松学舎大学には、科目等履修生制度があり、大学の授業を広く一般の皆様に公開しています。科目等履修生制度とは、大学で開講している授業科目（一～数科目）を学生と一緒に受講し単位も取得できる制度です。

本学学生のご父母の皆様に、生涯教育の一環として一人でも多く大学の授業を受けて頂きたいとの趣旨から、登録料の免除、科目等履修料の減額措置を講じております。この機会に、是非お子さんと一緒に大学の授業を受けられることをお勧め致します。内容は、次の通りです。

■公開科目
学部・大学院で開講している授業科目のうち、原則として演習科目を除く授業科目を公開いたします。

■募集要項
平成二十五年度の募集要項についてのお問合わせは、二月になりましてからお願いします。

■授業料
一科目　通年科目　三万円
　　半期科目　一万五千円

■問い合わせ先
二松学舎大学教学課

編集後記

明けましておめでとうございます。

昨年、二松学舎大学は創立百三十五周年を迎え、今年から新長期ビジョン実現に向けた新しい一年のスタートをきりました。「グローバル化に向けて時代に適う人材の輩出」に向けて改革を進めていく二松学舎大学に父母会もできる限りの応援をしていきたいと思います。

父母会の活動も父母会総会、地区別懇談会、百三十五周年式典参加、創縁祭での無料休憩所、国際交流会等おかげさまで毎月ひとつひとつの行事を無事に執り行うことができました。

この会報がお手元に届くころには、父母会役員は父母会主催「卒業パーティ」の打ち合わせに汗を流していると思います。今年もご案内の通り、帝国ホテルで盛大に行います。卒業生の皆さんは健康に留意され、学生生活の締めくくりとして、教職員の皆様や4年間勉学を共にした仲間と楽しいひと時を過ごしていただければと思います。震災以降まだまだ不透明感のある日本経済ですが、二松学舎大学の卒業生として、社会に貢献されることを願っています。